

## 高齢者施設における結核対策の課題に対応した健康教育について

○山下恵奈<sup>1)</sup>、田村ひろみ<sup>1)</sup>、阿波野恵<sup>1)</sup>、坂本三智代<sup>2)</sup>、高妻真子<sup>1)</sup>、古家隆<sup>1)</sup>  
日向保健所<sup>1)</sup>、健康増進課<sup>2)</sup>

### 1 はじめに

管内における平成 28～29 年の結核新規登録患者（潜在性結核感染症除く）21 名のうち 65 歳以上の患者は 13 名（61.9%）を占めており、うち 4 名が高齢者施設入所者である。高齢結核患者は呼吸器症状がない者も多く、診断が遅れ、重症化することも少なくない。

高齢者施設での結核発生は、周囲への感染拡大のリスクも高いため、職員が高齢患者の特徴や感染拡大防止に関する正しい知識を持ち、適切に利用者に関わることができるための情報提供及び、健康教育が必要だと考えた。

そこで、今回、患者が発生した高齢者施設（A 施設）の職員を対象とした健康教育の方法について検討し、実施、評価したので報告する。

### 2 方法

(1) 健康教育前に、A 施設職員に無記名自記式アンケート調査を実施し、結果を分析

(2) A 施設職員を対象に健康教育を実施

受講者にアンケート調査を実施し、評価（教育直後及び 3 か月後）

### 3 結果

(1) **健康教育前アンケート調査**（A 施設職員 25 名、アンケート回収率 100%）

結核患者発生時の不安や分からなかったことについては、「結核の感染のしくみ」「結核患者・疑い患者への感染防止策や対応方法」「職員や利用者の健康管理」と回答した者が多く、職員にとって必要な情報であると考えられた。

結核の知識（19 問のクイズ形式）について正答率が 50% 以下であった設問は「結核患者が使用した衣服や食器、寝具は処分や消毒する必要はない」「結核を発病しても、入院する必要がない場合もある」「最近の結核患者の 6 割以上は高齢者（65 歳以上）である」「結核が疑われる人の介護は、結核がうつらないようにガウンや手袋を着用する必要はない」の 4 つであった。

アンケート結果を踏まえ、特に以下の点を工夫して健康教育を実施することとした。

- ① 結核や感染のしくみ：やさしい言葉をつかって特に丁寧に説明する。
- ② 感染防止策・対応方法：A 施設で発生した患者の実際の事例を振り返りながら、施設に合わせた対応策を伝える。N95 マスクの着用演習を実施する。
- ③ 職員や利用者の健康管理：チェックリストを活用しての健康管理の方法を提案する。

(2) **健康教育の実施**（A 施設教育受講者 18 名（受講率 72%））

教育の内容は 89% の職員が「とても分かりやすかった・分かりやすかった」と回答し、全員が今後の結核対策に「非常に役立つ・役立つ」と回答した。

施設内で結核患者が発生した時の不安や分からないことについて、教育前と 3 ヶ月後とで比較すると、「必要な感染防止策」「結核がどんな病気なのか」「職員や他の利用者の健康管理」「診断が確定するまでの患者の対応」の項目で減少していた。一方で、「他の利用者への感染」や「自分への感染」の項目については不安と回答した者が増加した（図 1）。

結核の知識については、正答率が 50% 以下だった設問 4 問中 3 問で、教育後、正答率が上昇していた（表 1）。

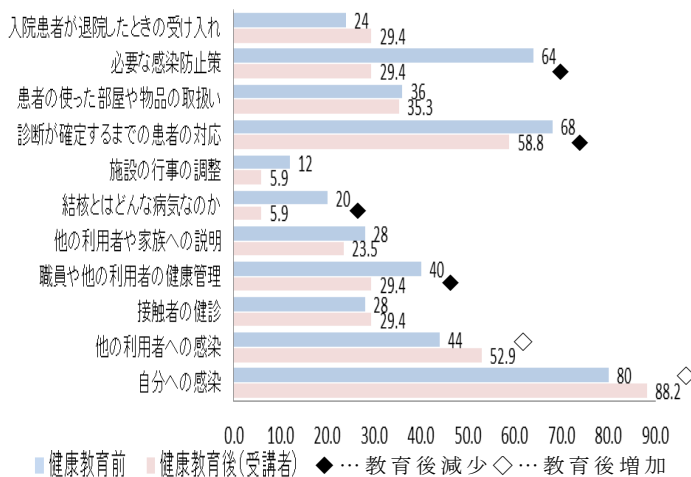


図1 施設内で結核患者が発生した時の不安や分からないこと (%)

表1 結核の知識（事前アンケートにて正答率が50%以下であった設問）

設問	正答	正答率(教育後)	正答率(教育前)
結核患者が使用した衣服や食器、寝具は処分や消毒する必要はない	○	24.0%	46.7%
結核を発病すると、必ず入院する必要がある	×	36.0%	56.3%
最近の結核患者の6割以上は高齢者（65歳以上）である	○	40.0%	47.1%
結核が疑われる人の介護は、結核がうつらないようにガウンや手袋を着用する必要がある	×	44.0%	31.3%

教育後、結核に対するイメージや心構えなど変化があったと回答した職員は11名(65%)で、どのような変化があったかについては「知識が増えたことで不安がなくなった」「対応方法を理解し自信に繋がった」等の回答であった。

#### 4 考察

高齢者施設における結核対策を充実させるためには、知識の普及だけでなく、施設の現状や職員が困っていることを一緒に考えることも重要<sup>1)</sup>である。今回、事前に職員の不安や困っていることについて把握した上で、具体的な解決策を教育内容に盛り込んだことは、不安軽減など一定の教育効果に繋がったと考える。

教育後に、感染防止策の項目「結核が疑われる人の介護は、結核がうつらないようにガウンや手袋を着用する必要がある」で正答率の減少がみられたが、これは感染予防の重要性を感じるあまり過度な感染防止策の認識に傾いたためと考えられた。そのため、今後は結核の知識についての正答や解説を盛り込んだ資料を作成し活用することにより、施設内でのさらなる知識の定着につながるよう働きかけていきたいと考える。

教育内で具体的に取り上げた内容について不安の減少がみられており、自身の変化として「知識が増えたことで不安がなくなった」と感じた職員もいることから、結核の知識や感染防止策の方法を理解したことが不安の軽減に繋がったと考える。一方で、施設内で結核患者が発生した際に、他の利用者や自分への感染が不安だと感じている職員の割合が教育後増加した。このことは、結核に対する危機感を覚えた職員が増加したとも考えられるため、より具体的な評価のために、実際の職員の考えや認識の変化なども把握できるアンケート項目をさらに検討する必要があると考えた。今後は、事前・事後アンケートを含む健康教育の内容を形式化し、高齢者施設において結核患者が発生した際は、今回の教育内容を基本とした上で、施設の個別性を考慮した健康教育を実施していきたい。

#### 5 おわりに

平常時の対策として保健所で実施する高齢者施設向けの感染症研修会等で、結核に関する一般的な知識等の教育も引き続き行っていく。

#### 引用・参考文献

- 1) 柴田未来:「地域とつくる！高齢者施設の結核対策－高齢者施設結核対策ガイドライン・結核啓発媒体の作成を通して－」, 複十字, No. 364, 16-17, 2015